

医者も知らない平穩死



〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「平穩死」10の条件」など。

院から次の施設に移るために「胃ろうが必要」。悲しいかな、こう考えている病院の医師が多いように思います。

平穩死に関する講演会で全国を飛び回る生活が続いています。いろんな人から「認知症などの高齢者に胃ろうを勧める先生が多いのはどうしてでしょうか?」と質問されました。著書などでも触れているのですが、改めて考えてみたいと思います。

1つ目は、「患者を餓死させられない。延命こそが医者の使命だ」。病院の医師の「常識」では、食べられなくなった患者さんに胃ろうをしないということは、患者を餓死させること。だから100歳を越えて、だれ

の目からも「寿命を全うしつつある」という患者さんにも、「心胃ろうの提案をします」。

2つ目は、「家族や多くの親戚から訴えられてしまうかもしれない」。患者さん本人が「胃ろうは嫌だ」という意思を示していたとしましう。でも、患者さんが亡くなった後、家族や遠くの親戚が「胃ろうを作ら

なかつたのは医師の怠慢」と言っていた家族も、遠くの親戚から「胃ろうのやいの責められ、胃ろうをしなかつた医師は、胃ろうを作つて、栄養補給の方法を確保しておかなくてはならないと

医師の本心は3つ。

3つ目は、「急性期病者えています」。

3つの医師の本心を知りつつ、それと真反対をいく私は、一般的な医師からは「手抜き医療、ないし患者さんの「将来」を考えない冷たい医師」と評価されていることで

胃ろうを作る医師の本心



(写真はイメージ)

しう。